

# 水晶を基軸とした山梨活性化のための提言



## はじめに

NPO法人山梨水晶会議は、「山梨の水晶」が名実ともに県民の文化を育みその誇りとなり得るよう、水晶を基軸とした地域振興、産業振興、観光振興、環境保全等の活動を行うべく発足しました。

わが県は、多数の水晶鉱山と良質な水晶を産出する地質学的条件に恵まれ、さらにはそこから伝統的水晶研磨産業が発展し継承されてきた永い歴史があります。

しかし近年、かつての鉱山跡は放置されたまま荒廃し、また加工工場や水晶研磨職人の激減により、伝統的な職人技やその技法も失われようとしています。県民すら水晶を身近に感じることは少なく、地域の自慢という実感はなお一層希薄であるといえるでしょう。

地域に根ざした伝統文化の一つが消えゆくこうした事態に私たちは危機感を覚え、早急に対応していく必要性を強く感じています。

現状の問題に目を向け、山梨県民が一丸となって「水晶」を守り継承する活動を行うことは、地域活性化・産業振興はもちろん、将来にわたって山梨が発展していく道筋をつけていくことでもあります。

私たちNPO法人山梨水晶会議は、比類なき歴史と伝統に裏打ちされ、多くの人々に憧れを抱かせる「水晶」を再び甦らせ、新たな時代にふさわしい「山梨の水晶」を地域活性化の基軸として発展させるため本提言を行います。

## 第1章 なぜ山梨は水晶なのか

### 1 山梨の地質の特徴と水晶鉱山

山梨は「山紫水明」の地と言われ、時代を問わず多くの人々に親しまれてきた。それは、単に“美しい自然に囲まれた地”であるだけでなく、貴重な自然資源に恵まれ、同時にそれを活かして産業が営まれてきた長い歴史を有しているからといえるだろう。

とりわけ、「水晶」はその最も顕著な産物の一つである。山梨県北部に位置する秩父山地の花崗岩層には、向山鉱山、黒平鉱山、水晶峠、バッテリー鉱山、八幡山鉱山、乙女鉱山、小檜山、川端下、小川山などの水晶脈が知られている。そこから産出する水晶は無色透明かつ大型が多く、日本式双晶に代表されるような希少性・美観性が認められる。

### 2 「山梨の水晶—水晶製品加工—」の歴史

山梨の「水晶」の歴史は長い。考古学的に見ても、縄文時代から水晶を用いた鏃などの加工品が全国各地で発掘されている。また、古墳時代には管玉、勾玉、丸玉等の水晶製品が作られており、それらも近年発掘された。とりわけ、埼玉県反町遺跡の出土品は、「山梨の水晶」が使用されており、古くから山梨県産水晶が流通していたことを示している。

さらに天正年間、金峰山での水晶発見を経て、江戸時代には「山梨の水晶」での加工品—丸玉、根付、緒メ、数珠、眼鏡、印材等が世に出るようになった。

明治初期には水晶工芸品類の加工技術が飛躍的に発展し、明治10年(1877年)の第1回内国勸業博覧会にも多くの作品が出展されている。また、「山梨の水晶」の蒐集家として有名な百瀬康吉氏もこの時代に活躍した。その国内有数の水晶標本である「百瀬コレクション」は、現在山梨大学水晶館に展示されている。

大正時代に入ると、“甲州水晶”の代表製品である首飾り(ネックレス)・彫刻品等が市場に出回るようになった。また、大正7年にはブラジル等からの原石輸入が開始され、次なる産業の段階へと進んでいく。

昭和には戦争をはさんで、物産としての水晶製品ブームが起こった。しかし、それを機に増加した海外からの製品輸入と人工水晶の登場が相対的な価値の低下をもたらし、同時に県内の研磨産業の衰退を招く事態となった。

現在、大量消費の時代が終わり、“量から質”へ価値観が転換しつつあることから、「伝統工芸として甲府で加工した研磨製品」のニーズが高まりつつある。それ故、数少なくなった工場<sup>こうば</sup>を建て直し、現役の水晶研磨職人から次世代への伝統技術を継承していくことが緊急の課題となっている。

### 3 現状と課題

先に示したように、山梨の地質環境から生まれた水晶研磨技術は、永い歴史の中で多くの県民、職人、商人(行商人)らによって全国に発信され、「山梨の水晶」「水晶の山梨」という認識が定着した。

実際、山梨県を訪れたことのない人でも、山梨のイメージの一つとして水晶を挙げる人が多い。①水晶鉦山がある、②水晶職人が息づく、③街中に水晶があふれている、他の地域には無い独特の雰囲気を持った場所一、それが多くの人々が「水晶の山梨」に持つイメージである。これこそが“地域ブランド”であり、それを大事に育て発展させていくことが、山梨活性化の原点でもあるといえるだろう。

とはいえ、現在の県内産業は、必ずしも「水晶」を大切にしているとは言い難い。むしろ、「水晶は山梨独自の伝統であり、山梨の個性を作る重要な財産である」という意識が、極めて希薄に見える。真に伝統を形にした水晶製品はごくわずかで、輸入品や合成水晶が「山梨製天然石」のように販売されていることすらある。その価値が十分に理解されていないため、水晶は完全にジュエリーの影に隠れてしまい、「山梨の水晶」を歴史と伝統に裏打ちされた真の山梨ブランドとして育てようとする動きは無いに等しい。

さらに、NPO の紹介活動の中で業界とは無関係の山梨県民にも触れ合ったが、半数以上の人々が山梨が水晶の産地であること、水晶産業が江戸時代から続く伝統産業であることを知らなかった。

現在、山梨の地域経済を牽引するのはジュエリー産業であっても、人々の憧れの対象には少なからず歴史的な水晶産地の雰囲気がかもしロマンがあるはずである。私たちが大切にしたい「その土地にしかないもの、そこでしかできないもの」こそ、人々の尊敬と憧れを集めると考える。しかし、山梨に住む人々の意識が低ければ、その尊敬と憧れは大きな失望となるに違いない。

こうした現状を放置し、正しい問題意識を持たなければ、近い将来、「山梨の水晶」という伝統文化は消えてしまうかもしれない。山梨だけの伝統ではない。日本の伝統の一つを滅ぼしてしまうことになる。

何より、本物へのこだわりが重視され、ものづくりの尊さが見直されている現在こそ、山梨が新しい視点で水晶に回帰する絶好の機会ではないだろうか。

それ故、私たちNPO法人山梨水晶会議はこれより以下、現在指摘し得る個々の問題点を明示し、その具体的な対策を提起していく。

## 第2章 水晶を基軸とした山梨活性化のための具体的活動

### 1 乙女鉱山保護・整備の提言

山梨には、水晶を産出する鉱山が多数存在している。言うまでもなく、水晶の聖地の起源としての水晶鉱山は、「水晶の山梨」のシンボルとして欠かせない。しかし、残念ながら、その事実は一般に知られておらず、行政もまた歴史ある水晶鉱山跡を事実上放置したままとなっている。

しかし、こうした無策は、水晶鉱山跡の自然災害による崩壊、さらには水晶原石の盗掘といった人的被害を招き、修復不可能な損害をもたらそうとしている。とりわけ乙女鉱山(山梨市)では、山梨・首都圏・愛知・京都などの鉱物収集家が良好な水晶やガマを求めて採掘を繰り返し、近年坑道や崖面の崩落が進んでいる。峡東林務事務所は県有林入山禁止の措置をしているが徹底されておらず、休日には数十人が野営することもめずらしくない。

これ以上の被害を食い止めるためには、専門家も交えながらより積極的な保護姿勢を見せることが急務だろう。とりわけ人的被害に対しては、パトロールなどの「監視」も不可避ではあるが、鉱山に関心を持って訪れる人たちと共生し得るルール作りも検討していきたい。何より、崩落の進む乙女鉱山の現状を、具体的なデータとともに広く周知していくことが、私たちの近々の課題である。

また、鉱山跡の近代産業遺産認定に向けた総合的な調査(鉱山学・地質学・考古学・建築学・土木工学・生物学・水文学・環境学・全面測量)も、望まれるところである。

とはいえ、乙女鉱山は秩父多摩甲斐国立公園内であり、県有林として環境保護の規制も避けられない。さらに、冬季には零下20度を超える寒冷地で、12月～4月には牧丘・川上線大弛峠林道が閉鎖される。山岳地で熊の出没も度々あり、自然保護を図りながら整備・管理を進めていくにはまだハードルが高いといえるだろう。

そうした状況の中、山梨市は2006年に乙女鉱山跡を文化遺産として見直し、観光資源として整備する構想を提案した。「ジオパーク」活用策を含め、今後の市の対応に注目しながら、連携を図っていきたい。

何より水晶鉱山跡を保護することは、自然を守るという環境面のみならず、そこに育まれた水晶産業の歴史を守ることでもある。当然それは一団体では困難であり、県民・行政が一丸となって取り組む課題というべきだろう。私たちがまずすべきことは、乙女鉱山を始めとする水晶鉱山跡の自然価値・歴史価値を訴え、広く理解を求めていくことに他ならない。当面、学習会はもとより、定期的に鉱山跡を案内して現状を説明する機会を作っていきたいと考えている。

## 2 技術後継者育成の提言

山梨には、他に類を見ない高度な水晶研磨技術がある。しかし、その技術を支える研磨職人の減少が現在、深刻な問題となっている。

職人の高齢化や、粗雑な安い輸入品によってシェアを奪われたことなどから県内での仕事が激減し、工場を閉めてしまう例も少なくない。そのような状況の為、技術の後継者となる弟子を受け入れている職人はほとんどなく、工場の閉鎖とともにその独自の技術も失われつつあるのが現状である。

これらの職人の技術を伝統文化として継承していくために、以下いくつかの施策を提起する。

職人の技術を守るためには、まず外からの環境づくりが求められてくる。直近の処置としては、引退しつつある職人の技術や限られた職人にしかできない技術が途絶えないよう、技術を習得する素地をもつ現役の熟練した職人に継承してもらうことである。そのため、職人同士を紹介する機会を、積極的に作っていききたい。

次に、時間のかかる中長期的な施策として、技術の形式知化にも取り組んでいく。その一つとして、職人とその研磨技術のデータベース化を行う。データベースを用いることで、研磨の仕事と適切な職人とのマッチングを容易にし、仕事の面でも技術伝承の面でも、職人とその技術に広範にアクセスできるようにしていきたい。また、特別な加工技術については、加工の様子を撮影・記録し、ゆくゆくは研磨技術の「教科書」を作成することも考えている。同時に、水晶ミュージアム設立に関連して、職人への聞き取り調査を行い、水晶研磨技術の歴史を整理することも不可避である。

最後に、長期的な施策として、若い人材確保の道筋を作っていく。セミナーなどを設けて、外部の人が職人の技術を学ぶ機会を作り、関心を深めてもらうことも有効だろう。可能であれば、工業技術センターなどの施設とも連携し、道具や機械の確保に努め、NPO法人で職人を育てるシステム(職人学校)も模索していく。

高い技術を持ちながら、その文化が消滅しかねない状況にある山梨県の水晶研磨職人を保護することは、日本の伝統産業を守ることでもある。

手遅れになる前に、行政や業界に働きかけながら、私たち独自の対策も早急にも実施していきたい。

### 3 水晶ミュージアム設立の提言

周知の通り、山梨県はフォッサマグナ、富士山、南アルプス、秩父山系など地形的に特異な特徴を持った県である。また、地質においても、金峰山周辺、白州山麓などの花崗岩帯には水晶が大量に埋まっており、前期縄文時代より生活の道具として利用されてきた。

明治時代以降は採掘量の増加や研磨技術の発展に伴い、様々な工芸品が作られるようになり、日本式双晶などの原石とともに世界中の博物館や蒐集家に輸出された。また、後にその研磨技術は水晶発振子などの工業製品にも活用され、山梨はもとより日本の産業を担うまでになった。

こうした他県にはない水晶文化や研磨の歴史を活かして、山梨県にしかできない水晶に特化した学術的施設「水晶ミュージアム」を設立することが、観光立県山梨には求められているのではないかと。

具体的な中身としては、①山梨県の地質構造的解説(全県の立体地質模型等)、②乙女鉱山をはじめとする県内の鉱山(金山を含む)紹介や歴史解説、③山梨産水晶原石と鉱物の展示解説、④釈迦堂遺跡に見られる水晶鏃等の水晶文化の起源解説、⑤縄文より現代までの水晶製品(収集)と道具を含めた技術技法の解説、⑥人工水晶の歴史と解説(現在の最先端技術発振子など)、⑦世界中の珍品巨大原石の展示解説、などを検討していく予定である。

水晶ミュージアムとしては、とりわけ⑤・⑥が特徴あるものになるだろう。

何より、私たちが目指すのは、「ジュエリー中心」あるいは「販売目的」のためのスペースではなく、“水晶の聖地—山梨”のシンボルにふさわしい施設である。

来館者に山梨でしか味わえない知的好奇心を提供できるような施設の設立に向け、今後具体的な活動を行っていききたい。ひとまず、後世に伝えるべき貴重な製品を写真に残し、資料としてまとめることが早急の課題である。

また、研究等の理由で県外(ないし国外)へ流失してしまった原石や加工品をリストアップし、それらを再び故郷山梨に戻すべく、関係機関への働きかけを行うことも検討している。

さらに、③と関連して、現在山梨大学に所蔵されている「百瀬コレクション」の周知活動を進めている。山梨県民でさえその存在を知っている人は少ないが、百瀬康吉氏が残した水晶の蒐集品は言うまでもなく県の貴重な財産であり、それらを守り伝えていくことは欠かせない。

それと同時に、同コレクションを保管する目的で昭和初期に作られた「水晶庫」も、大変歴史的価値の高い建造物であり、私たちはそれを文化財として長期的に保護する必要性を感じている。

## おわりに

NPO法人山梨水晶会議は、「山梨の水晶」こそ世界に誇る比類なき地域資産であることを県内外の方々に広く訴えることで、生き活きとした地域を創出していく為の活動を進めています。

長い準備期間の後、多くの方々のご協力のもと、2009年4月1日付で法人登記が完了しました。それ以降今日に至るまで、いろいろと試行錯誤を繰り返しながら、ここに一つの提言をまとめることができました。

これは、鉾山見学会や水晶に関する勉強会など、様々な活動を行う中で築き上げられたものです。慣れない作業ゆえ不十分な点もあるかもしれませんが、今後の活動において少しずつ補充していきたいと考えています。

歴史や伝統を守り、「山梨の水晶」を起爆剤とした地域活性化を実現するには、多くの方々との共通基盤を作り上げ、大河の流れを生み出す必要があることを強く自覚しています。

本提言をご一読いただき、どうぞ皆様の幅広いご意見、ご感想、ご提案をお聞かせ下さい。よろしく願いいたします。

2009年11月30日

理事 一同

---

※ 本提言に関するお問い合わせは、下記にお願いします。

[宛先] 〒400-0836 山梨県甲府市小瀬町315-26

[TEL/FAX] 055-241-9736

[E-MAIL] info@yamanashi-suisho-kaigi.org